大宮まゆっこ新聞

Vol.018
2024年3月1日発行
OMIYA LIBRARY

図書館のご近所さん　押田謙文堂

寒風吹きすさぶ受験シーズンの真っ只中、書籍の販売はもちろん教科書販売や北辰テスト、検定等の申し込みでお馴染みの押田謙文堂を訪れました。

押田謙文堂は１８８０年（明治１３年）に現社長である髙田洋子（たかだようこ）さんの曾祖父・押田仙助（おしだせんすけ）さんが与野本町で創業しました。祖父の押田謙二郎（おしだけんじろう）さんが昭和１０年頃に大宮に出店。現在の場所で空襲にも見舞われましたが、荷車で与野まで売り物を運んで避難したという商魂逞しいご先祖のおかげで現在まで大宮駅東口の大宮銀座通りで地域の書店として親しまれています。

大宮銀座通りは元々川越新道という名称でした。しかし、戦後これから発展していくのによその町の名称はふさわしくないということで、商店の人々の提案により全国で繁華街の代名詞として広く使われている「銀座」の名が付けられ昭和２２年から正式に大宮銀座通りと呼ばれるようになりました。道路を舗装し、街路樹に柳が植えられたこの通りは、かつてアーケードがあり、個人商店も多く活気に溢れていたそうです。

現在４代目社長の髙田洋子さん。大宮で生まれ育ちここ地元大宮には一方ならぬ想いがあります。現在進行中の再開発にも複雑な気持ちがあるとか。

それでは早速、売り場を見せていただきましょう。通りに面した入口から入店してみます。明るすぎない照明で落ち着いた店内。木製の書棚が重厚感を感じさせます。よく売れる商品は入り口近くに陳列され、店内に足を踏み入れたお客様の目につきやすいようになっています。その他にお薦めの商品を展示しているテーブルはなんとアンティークのもの。わざわざ社長ご夫妻で買い求めたそうです。

←アンティークの机

児童書コーナーではクマがお出迎え←

さて、店舗奥の階段にはキラキラと輝くようなステンドグラスが！オーダーメイドステンドグラス制作工房「ステンドグラスバロック」の作品で、専務取締役の髙田晴夫（たかだはるお）さんが原案をデザインされました。ブルーを基調とした清々しい印象でとっても美しい。これは一見の価値あり！

２階は主に文具や参考書、児童書、コミックがあります。文具の棚は明るい木目調で外国製のおもちゃが飾られています。以前、大宮まゆっこ新聞Ｖｏｌ．１２で紹介したＴｏｙ－Ｔｏｙのおもちゃもディスプレイされていました。そして奥には大宮銀座通りに面したひときわ大きな窓ガラスがあります。窓際に立つと眼下に通りを行きかう人々を見ることができます。本には紫外線が大敵でこんなに大きな窓は珍しいですが、開放感があってふわりと入ってくる光の中で本を選ぶことができる素敵な場所です。

←ステンドグラス

→タイポグラフィが踊るブックカバー

3階は法律や各種資格書など専門書が、そして４階にあがると教科書がずらりと並んでいます。教科書販売は、限られた書店しか取り扱うことができず大宮区では押田謙文堂を含め数社のみの取り扱いです。販売するにはその保管場所も必要なのだとか。また、創業の地、与野本町では、中央区の教科書販売を担っています。

本は、一般のお客さんのみならず、学校や図書館、区役所、美容室、病院などにも配達しています。昔からの馴染みのお客様にもお届けしていると聞いて、個人商店ならではのきめ細やかなサービスだと感じました。

ＩＣＴの時代になっても紙は必要！と説くお２人。大正時代から変わらない売り方で今まで続けてこられているのは、地元の人達との繋がりを大事にして、文化を絶やしてはいけないという想いの強さがあるからなのだと取材を通して伝わりました。

←髙田夫妻

参考図書

『大宮銀座通り80年のあゆみ』
大宮銀座通り商店街協同組合／編
大宮銀座通り商店街協同組合　1974年

押田謙文堂
【住　所】さいたま市大宮区宮町1丁目18番地
【電　話】048・641・3141
【営業時間】10時～19時
（日・祝は18時30分まで）

ゆかりの人物コーナー

『ふるさとを描く Ⅱ』より

「秋山静子 －大宮の景色－」

旧大宮市の景観は、時代の流れとともに大きく変わりました。自然豊かな緑が多くあった場所も、今は道路や家屋などが建ち並んでいます。旧大宮市出身の秋山静子（あきやましずこ・1940年～）は、変化し成長していく市内を描き続けた女性画家です。市内を中心に活動され、大宮市文化賞をはじめ数々の賞を受賞、展覧会への作品の出品や個展の開催をしていきました。

「好きなことをずっと続けたい！」「絵を描き続けたい！」という思いをもとに、美術学校に進み卒業したのち写実画に専念する中で、大宮の景観を描くきっかけとなったのは、絵画教室の先生から「大宮も変わるみたいよ」という一言。当時（1980年代）大宮駅周辺は、都市計画に伴いビルの建設や新幹線開通工事などが行われ、街並みが大きく変わっていました。「自分の街を記憶したい！」との思いから、1983年より「景色」を描き続けてきたそうです。

作品はどれも繊細で、まるで当時の風景の中に入り込んでしまったかのような錯覚を覚えるほど。知らなかった風景もあり、懐かしさとともに驚きも感じます。もう見ることができない、失われていく景色に少し寂しく思う時もありますが、絵画として記録しておくことで、その時代その場所の空気や温度、質感までも残しておくことができるのですね。

参考資料

『ふるさとを描く大宮』
秋山静子／著　秋山静子／出版　1987年
『ふるさとを描く大宮Ⅱソニックシティからさいたま新都心へ』
秋山静子／著　秋山静子／出版　2008年
『埼玉の女性　完全保存版』サイシップ　2004年

大西民子の一首

バス降りて十字路よぎり来る君よ
夕陽の中の　われに手あげて

『まぼろしの椅子』

民子は１９４７（昭和２２）年、自分と同じ釜石市内で教員をしていた大西博と出会い結婚します。この歌に出てくる「君」とは、恋人だったころの博だと思われます。想い人を詠んだロマンチックな歌ですが、戦後まもない頃は恋の歌を発表すると反感を買うこともあったとのちに民子は語っています。

本屋さんが読んでいる本が気になったので訊いてみました！

ご紹介いただいた本

教科書に載っていたのを覚えている人も多いのでは？
『スイミー－ちいさなかしこいさかなのはなし－』
レオ・レオニ／作　谷川俊太郎／訳　好学社　1979年

9回出撃し、9回生還した特攻兵がいた
『不死身の特攻兵－軍神はなぜ上官に反抗したのか－』
鴻上尚史／著　講談社　2017年

危険を隠したその先にあるものとは
『大惨事と情報隠蔽－原発事故、大規模リコールから金融崩壊まで－』
ドミトリ・チェルノフ、ディディエ・ソネット／著　橘明美、坂田雪子／訳　2017年

戦後日本の歴史と謎
『日本はなぜ、「基地」と「原発」を止められないのか』
矢部宏治／著　集英社インターナショナル　2014年

意外と力仕事です

名言

「花火ってのは、いろんな場所で、いろんな人間が見てるだろ。もしかすると自分が見ている今、別のところで昔の友達が同じものを眺めているかも知れねえな、なんて思うと愉快じゃねえか？たぶんな、そんな時は相手も同じこと考えてんじゃねえかな。俺はそう思うよ。」

紹介した本
『ゴールデンスランバー―A MEMORY―』
伊坂幸太郎／著　新潮社　2007年

毎年仙台七夕祭りに行われる恒例の花火大会。主人公の青柳雅春（あおやぎまさはる）は、花火工場を手伝った縁で、花火の打ち上げを間近で見物させてもらえることに。これはその時の工場の社長の台詞である。そして、サブワードとして「人間の最大の武器は、習慣と信頼だ」、更にビートルズの楽曲「ゴールデンスランバー」から引用されている「故郷へ続く道」という歌詞が物語の道筋となる。

首相襲撃事件をきっかけに事件の容疑者となってしまった青柳を、昔の仲間や離れて暮らす両親が「習慣と信頼」でつながって、支える。その深さがこの物語を単なる逃走劇に終わらせず、読み終わった後も心に残る物語とさせているのだ。

青柳の父親がマスコミに対してはなった台詞（ここも最高！泣ける！）や、かつての恋人樋口晴子（ひぐちはるこ）の存在が、孤独な逃走劇に希望を与える。晴子のヒロイン性なんて自分の恋愛観と相まって胸がしめつけられるようだ……。

伊坂幸太郎の作品には、張り巡らされた伏線の回収に魅力を感じている人は少なくないだろう。この作品は、著作の中でも私が知る限り一番伏線が多い。文章のすべてと言っても過言ではなく、無駄は一つもない。何度も読み返すと、物語の映像がより鮮やかに浮かんでくる。

自分と同じように花火を見ているかも知れない友達や家族に会いたくなってきた。やはり、伊坂幸太郎はうまいなぁ。

見沼の流れと万葉の小径（こみち）、桜並木

田んぼに恵みの水を送る見沼代用水の西縁には、流れに沿って万葉集に登場する木々が植えられている「万葉の小径」が寄り添っています。さいたま市が誕生してから「見沼たんぼ桜ロードプロジェクト」によって植樹された並木道は、「見沼田んぼの桜回廊」として総延長20㎞越えのお花見散策スポットです。

歴史部　自転車の起源と認識のズレ

人力最速の乗り物「自転車」。皆様は自転車の起源と言われてどのようなフォルムを想像されるだろうか。「前輪が大きくて後輪が小さい。前輪にペダルがついているアレ」。実はそれ違うのだ。

自転車の起源は「ドライジーネ」と呼ばれる乗り物で、1817年ドイツのドライス伯爵によって発明された。2つの同じ大きさの車輪を前後に配置し、その間にまたがって地面を足で蹴って進む乗り物である。その後、ミショー親子により前輪にペダルを付けた「ベロシペード」が誕生し、ジェームズ・スターレーらが1870年に、ペダル付きの巨大な前輪に極端に小さい後輪の「ペニー・ファージング」を開発した。そう！多くの皆様が想像していたであろう自転車はこの「ペニー・ファージング」である。

ではなぜ、皆様が「ドライジーネ」ではなく「ペニー・ファージング」を自転車の起源ととらえてしまっているのか。おそらくそれはペニー・ファージングのデザイン性の高さではないだろうかと私は考えている。前輪と後輪の極端な大きさの違い、フレームやタイヤを含めた流線的な美しいフォルム。それに比べ地味な見た目の「ドライジーネ」は印象に残りにくい。

ちなみになぜ前輪が大きく後輪が小さくなったのか、その理由はスピードである。車輪を大きくすれば速く走れることがわかり、前輪を大きくし乗車する際のバランスを取りやすくするため後輪を小さくしたのだ。

現代の自転車ロードバイクと昔の自転車ペニー・ファージング。どちらもスピードを求めて進化したのに、似ても似つかない形になったのはとても興味深い。

参考文献
『50の名車とアイテムで知る図説自転車の歴史』
トム・アンブローズ／著　甲斐理恵子／訳
原書房　2014年
『ずかん自転車―見ながら学習調べてなっとく―』
森下昌市郎／著　自転車文化センター／監修
技術評論社　2023年
『自転車ものがたり』
高頭祥八／文・絵　福音館書店　2016年

わたしのすきなえほん

息子が１歳になった頃、近所の児童館に通い始めました。育児書にならって生活リズムを整えたい、と考えていたからです。息子にお友達を作ってあげたい、私もママ友に出会いたいとも願っていました。

先生方は優しかったのですが、児童館のアットホーム過ぎる雰囲気に私達はすぐには馴染めず息子は私の膝の上に座ってばかり。慣れない場所で、知らない大人や赤ちゃんに囲まれて心細かったのかもしれません。私には元気いっぱいに遊ぶお子さんが羨ましく見えました。

ある時「絵本を読みますよ」と先生が声をかけてくれました。それは『おおきなかぶ』でした。私たちの他に数組の親子が集まり、お話の始まりです。なかなか抜けないかぶに、みんな夢中！子供達がはしゃぐ様子を見て、先生は「うんとこしょ　どっこいしょ」の部分を何回も繰り返します。大人も子供も「うんとこしょ　どっこいしょ」と一緒に繰り返しました。

言葉選びの素晴らしさ、挿絵の力強さ、いつの時代も色あせない物語の面白さが魅力的な『おおきなかぶ』。昔話をもとにした長く愛される絵本なので、読んだことはありましたが新たな発見がありました。

その後、幸いにも児童館で知り合った親子と仲良くなり、毎日一緒に遊ぶようになりました。

絵本は一人で読むのも、親子で読むのも良いけれど、読んでもらってみんなで聞くと楽しさがふくらむのだな、と気づかせてくれた１冊です。

紹介した本
『おおきなかぶ －ロシアの昔話－』
A.トルストイ/再話
内田莉莎子/訳　佐藤忠良/画
福音館書店　2007年

大宮図書館
ホームページ

大宮図書館
X(旧twitter)

Xではイベントやスタディーコーナーの待ち人数など大宮図書館の情報を日々つぶやいています。ぜひ、フォローしてみてくださいね！

この刊行物の書影画像はBOOKデータASPから引用しています。

おおみや読書パトロン

第13回　テーマ『寄り添う』

動物と一緒に暮らしているひとの多くが思っているであろう。「この子がいなくなってしまったらどうやって生きていけばいいのか」と。

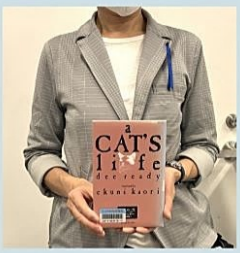
２匹の猫と暮らすわたしは彼らがまだ子猫の時からそんなことを考え、猫たちが誕生日を迎えるたびに人間より短いその寿命を思い、せつなくなって鼻の奥がツンとしたりする。

動物を人間の都合にあわせて生活させるのはエゴだと思うのだが、その償いのようにわたしは目いっぱいの愛情を猫にそそぐ。夏は人間不在の部屋のクーラーをつけっぱなしにし、冬はあったか電気クッションのスイッチを入れて出かける。そのうえ留守中に停電になったらどうしようとオロオロと考える。勝手な愛情を押しつけて、当の猫には迷惑なこともあるかもしれない。まったく人間の都合である。

この本は「あたし」こと猫のダルシーの視点で、彼女が生まれてから死ぬまでが語られている。自身の不慮の事故や、生きていたら避けて通れない病や老いの描写には胸が苦しくなるが、気高いダルシーの語り口に「ああ、こんなとき猫はそんなふうに考えているのか」と思わせられる。

猫の視点であるから飼い主は「あたしの人間」ということになる。「あたし」と「あたしの人間」の１７年４カ月と１日の物語は、人間からの愛情はけっして一方通行ではなく、おたがいに心の深いところで寄り添って生きているのだと安心させてくれる。いつか必ずお別れの日はやってくるけど、一緒に暮らすことは猫にとっても人間にとってもかけがえのない贈り物なのだと思わせてくれる。

ダルシーは著者と暮らした実在した猫である。ダルシーの行動の細やかな描写や、嫉妬や憎悪、歓びなど豊かな感情の表現は著者の精緻な観察によるもので、読む者は猫の体温を感じるだろう。ダルシーが人間に残したまっすぐな愛と、著者のダルシーに対する無償の愛がこの作品を生んだのである。次のテーマは「愛情」で。



紹介者　トントキ

紹介した本
『あたしの一生―猫のダルシーの物語』
ディー・レディー／著　江國香織／訳
飛鳥新社　2000年